兵庫津遺跡出土土錘の検討

―考古資料からみた中近世兵庫津の漁業

賀

茂

治

はじめに

るためには、 津では漁業が重要な生業の一つであり、 匹敵する。また兵庫津の船数を見ると、天和から貞享年間(一六八〇年 に従事する「漁村」としての顔である。江戸時代の享保年間には兵庫津 る必要があると考える。 西摂津地域における漁業の中心地であった。 の廻船・上荷船 に二一○人の漁師がいたと記録されている(¹。この数は水主の二三九三 この兵庫津には海に面した町としてもうひとつの顔がある。 流や商業活動についてはこれまで多くの研究が積み重ねられているが、 近世以降は西国街道の宿場町としても賑わった。当地における海陸の物 人と比べると少ないものの、 には四七六艘の漁船があり、これは総船数の約五七%を占め輸送用 在の神戸 物流や商業活動だけではなく、この漁業についてもっと知 、市兵庫区南部地域である兵庫津は古代から続く港町であり、 渡海船の合計を上回る② 百姓(二三〇人)や船大工(一六〇人)に 漁船数から見ると尼崎とならぶ このように江戸時代の兵庫 兵庫津という都市を理解す それは漁業

> コ壺、 整理 子)を素材として検討をおこなう。 要な漁法のうち、 って多くの発掘調査が行われている。その出土資料は膨大であり、 遺跡③ではこれまで兵庫県教育委員会や神戸市教育委員会・神戸 ていたのか、 本稿では江戸 ・報告されていないものも多いが、これまでに漁網錘 釣針などの出土が報告されている。 発掘調査で出土した漁具からアプローチを試みる。 、時代以前の兵庫津においてどのような漁業がおこなわ 発掘調査による出土量が多く分析の容易な漁網錘 本稿では釣漁と網漁という主 (沈子)、 兵庫津 市によ まだ 沈

おり、 できるものはほぼ焼物製のもの、すなわち考古学で言うところの 要であったことは明らかであるが、 れた『兵庫県漁具図解』 そこには石、 明治三〇年神戸で開催された第二回水産博覧会での展観のため編纂さ に限られる。 沈子に関する多くのデータがある。 焼物、 このため本稿ではこの土錘を分析の対象とする 金属の様々な沈子が見られる。石や金属の沈子が重 (4) に は、 明治中期の漁具が絵入りで詳説されて 実際に遺跡から出土し、 詳細については後述するが、 沈子と認識 土

る (8) 。 漁網 多くはない 世土錘の検討をおこなっているが⑨、 れている。 の種 的 兵庫津近辺の資料としては瀬尾晶太が西宮神社社頭遺跡出 な形態、 真鍋篤行(らが続き、 類と土錘の対応関係について踏み込んだ研究成果を発表してい 特に真鍋篤行は、 サイズ、 重量など諸属性の変化について検討がおこなわ 近年では安岡早穂でなど多くの研 明治期の水産誌や民具資料の検討をふまえ 中近世の資料についての研究例は 究があり、 土の 中

について考察する。期の漁業を記録した文献に拠りながら、兵庫津で使用された土錘と漁網幅)」について検討する。最後に真鍋篤行の研究や兵庫県における明治幅)」について検討する。最後に真鍋篤行の研究や兵庫県における明治について考察する。

1 対象とする資料

(1) 第六・一一~一三・一五次調査出土資料

一般国道二号共同溝整備事業に伴い兵庫県教育委員会が調査したもの

時期や周辺遺構からの出土遺物から各資料の帰属時期を推定してい 半の資料七〇点、 報告書は西出地区 孔径については今回計測をおこなった。 どちらの報告書も土 であり、 ている。 Ŧī. 縦断しており、 である。 め各資料の帰属時期を正確に特定することは難しいが、 七点がまとまって出土しているのが一つの遺構から出土した最多の例 次 (厚さ)については実測図から計測し、 印に分けて刊行されており、 浜崎・七宮地区一―二区SK〇一から一八世紀前半以降の資 大半は包含層や整地層など遺構に伴わないものである。 調査は神戸市兵庫区東柳原町から西出町まで、 兵庫津の三方のうち岡方から北浜がその範囲に含まれる。 後者では一三世紀~一九世紀の資料五三点が報告され (六・一二次) 錘の法量計測値が記載されていないため、 (10)と浜崎・七宮地区 前者では一八世紀後半~一九世紀 その結果が表1である。 実測図での計測が困難な重 近世の兵庫津 出土層位の比定 長さ・ 量と

(2) 第一四次・二〇次・二一次調査出土資料

遺構 几 か 末 調 れた兵庫津における魚類流通の中心地である。 戸時代の宮前町にあたる。 で神戸市教育委員会が調査したものである②。 などが多く出土している。 らの出土である。 九点が報告されている。 第一四次・二〇次・二一次調査はいずれも神戸市兵庫区七宮町 査 面の比定時期を資料の帰属時期としている。 0 八世紀前半の資料が一 所は江戸時代の西宮内町にあたる。第二〇次調査では 第二一次調査では遺構に伴わず時期を推定できな ここでは一五世紀~十八世紀後半以降の資 大半が包含層や整地層からの出土であり、 宮前町には多くの魚屋があり、 八点出土している。 第一四次の調査箇所 この調査でも魚骨や 第二〇次調査・二一 大半は包含層 魚市場 が置 亍 貞 Ħ

表 1 兵庫津遺跡西出地区 (6・12次調査)、浜崎・七宮地区 (11・13・15次調査) 出土土錘計測表

浜崎・七宮地区(11・13・15次)

西出地区(6·12次)

浜岭	・七宮地図	<u>×</u>	$(11 \cdot 13 \cdot 15)$	火)				
報告 番号	分類名		時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)
5	管状土錘	b	18C前半以降	4.3	1.2		0.42	6.2
6	管状土錘		18C前半以降	4.4	1.2		0.40	5.9
7	管状土錘	b	18C前半以降	4.1	1.2		0.35	5.7
8	管状土錘		18C前半以降	4.2	1.2		0.35	5.3
9	管状土錘	b	18C前半以降	4.1	1.2		0.40	5.8
10	管状土錘		18C前半以降	4.2	1.2		0.37	4.5
11	管状土錘	b	18C前半以降	4.0	1.2		0.41	5.0
12	管状土錘		18C前半以降	4.0	1.2		0.35	4.3
13	管状土錘	b	18C前半以降	3.9	1.2		0.32	4.7
14	管状土錘	b	18C前半以降	3.8	1.2		0.38	4.9
15	管状土錘	b	18C前半以降	3.5	1.2		0.34	3.8
16	管状土錘	b	18C前半以降	3.5	1.2		0.34	3.7
17	管状土錘	_	18C前半以降	3.4			0.30	3.2
	管状土錘		18C前半以降	3.4	1.1		0.32	(4.4)
18		b L						-
19	管状土錘	b	18C前半以降	3.4	1.1		0.34	2.6
20	管状土錘		18C前半以降	3.2	1.0		0.32	2.2
21	管状土錘		18C前半以降	3.0	1.0		0.31	2.0
48	管状土錘	a	18C前半以降	5.0	3.7		1.50	57.0
49	管状土錘	d	18C前半以降	4.2	4.0		1.60	55.8
50	管状土錘	a	18C前半以降	3.5	3.0	0.0	1.40	26.8
89			18C前半~後半	10.1	7.3	2.9	0.80	(183.8)
116	管状土錘	a	19C前半頃	4.8	3.2		1.40	37.0
158	管状土錘	-	17C前半	4.0	1.8		0.50	9.8
159	管状土錘	b	17C前半	3.8	1.0		0.30	4.6
219	管状土錘		15C代	3.5	3.0		1.70	24.2
271	管状土錘		13C~17C	4.0	4.7		1.70	65.6
272	管状土錘	d	13C~17C	4.0	4.5		1.70	59.3
273	管状土錘	b	13C~17C	3.8	1.0		0.40	(3.8)
274	管状土錘	b	13C~17C	3.2	1.0		0.35	2.5
275	管状土錘	b	13C~17C	3.2	1.0		0.32	2.7
327	管状土錘	b	17C代	4.2	1.0		0.40	2.1
328	管状土錘	b	17C代	3.0	0.9		0.35	2.5
329	管状土錘	b	17C代	3.0	1.0		0.40	2.0
432	管状土錘	b	17C代	3.5	1.0		0.40	(2.5)
459	管状土錘	b	近世以降	4.0	1.0		0.40	3.7
501	管状土錘	d	16C後半~17C前半	4.0	4.5		1.70	70.8
502	管状土錘	d	16C後半~17C前半	3.0	4.3		1.70	51.3
503	管状土錘	b	16C後半~17C前半	4.3	1.1		0.40	5.7
574	管状土錘	b	16C後半~17C前半	4.8	1.1		0.35	5.7
575	管状土錘	b	16C後半~17C前半	4.0	1.1		0.34	(5.0)
576	管状土錘		16C後半~17C前半	3.6	1.2		0.32	5.6
577	管状土錘		16C後半~17C前半	3.4	1.2		0.37	5.0
578	管状土錘		16C後半~17C前半	3.4	1.0		0.40	3.7
730	棒状土錘		16C前半	5.0	1.4	1.2	0.40	(13.7)
731	有溝管状土色	諈		7.2	3.8		1.40	87.1
	管状土錘		14C~15C	5.7	3.0		1.10	35.6
1245	管状土錘	a	14C代	7.5	4.2		1.90	139.3
1323	管状土錘		15C後半~16C前半	3.8	4.4		1.70	50.0
1404	管状土錘		14C後半~15C	6.2	1.7		0.40	12.3
1515	管状土錘		近世~近代	3.2	3.8		1.70	44.0
1641	管状土錘		中世~近世	6.4	3.3		1.50	46.3
2244	管状土錘		近世~近代				1.70	56.1
2244	管状土錘		近世~近代	5.5	3.4			
4440	日小上班	Ŋ	还用"九八	4.5	1.4		0.40	5.0

() は残存値 *斜体*は残存部分からの推定値

西出地区(6・12次)									
報告 番号	分類名		時 期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	
477	管状土錘	b	19C前半以降	4.2	1.1		0.37	4.8	
478	管状土錘	b	19C前半以降	4.0	1.1		0.35	5.5	
479	管状土錘 管状土錘	b b	19C前半以降 19C前半以降	3.8 4.7	1.2		0.37	5.4	
481	音水上 姓 管状土錘	b	19C前平以降	4.7	1.1		0.35	5.4	
482	管状土錘	b	19C前半以降	4.5	1.1		0.37	5.7	
483	管状土錘	b	19C前半以降	4.4	1.0		0.35	4.6	
484	管状土錘	b	19C前半以降	4.4	1.0		0.36	4.1	
485	管状土錘	b	19C前半以降	4.0	1.0		0.36	3.9	
486	管状土錘	b	19C前半以降	4.0	1.1		0.32	4.6	
487	管状土錘	b	19C前半以降	4.0	1.2		0.36	6.1	
488	管状土錘	b	19C前半以降	(3.8)	1.1		0.37	(4.9)	
489	管状土錘	b	19C前半以降	4.0	1.1		0.35	5.9	
490	管状土錘 管状土錘	b a	19C前半以降 19C前半以降	5.0	3.7		2.00	4.8 53.3	
789	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.0	1.1		0.40	3.0	
790	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.2	1.1		0.36	3.0	
791	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.4	1.0		0.40	2.9	
792	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.8	1.1		0.35	4.3	
793	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.6	1.2		0.36	5.6	
794	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.6	1.1		0.35	3.6	
795	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.6	1.2		0.40	4.4	
796	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.0	1.0		0.31	2.5	
797	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.2	1.1		0.32	3.5	
798 799	管状土錘 管状土錘	b b	18C後半~19C前半 18C後半~19C前半	3.4 4.0	1.2		0.40	5.9	
800	管状土錘	b b	18C後半~19C前半	(3.4)	1.1		0.35	(3.4)	
801	管状土錘	b	18C後半~19C前半	(2.5)	1.1		0.40	(2.8)	
802	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.4	1.2		0.36	4.0	
803	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.4	1.1		0.32	3.6	
804	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.4	1.0		0.31	3.3	
805	管状土錘	b	18C後半~19C前半	(2.4)	1.1		0.35	(2.7)	
806	管状土錘	b	18C後半~19C前半	(2.4)	1.3		0.32	(2.3)	
807	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.0	0.9		0.25	2.0	
808	管状土錘 管状土錘	b b	18C後半~19C前半 18C後半~19C前半	3.8	0.8		0.28	2.6	
810	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.4	1.1		0.30	4.4	
811	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.9	1.2		0.30	5.8	
812	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.0	1.0		0.30	2.8	
813	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.3	1.0		0.34	2.6	
814	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.5	1.1		0.34	4.3	
815	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.4	1.3		0.30	4.9	
816	管状土錘	<u>b</u>	18C後半~19C前半	3.5	1.1		0.35	4.3	
817	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.5	1.1		0.37	3.4	
818	管状土錘 管状土錘		18C後半~19C前半 18C後半~19C前半	3.6	1.2		0.40	4.9	
820	管状土錘	b	18C後半~19C前半	3.7	1.1		0.37	3.8	
821	管状土錘		18C後半~19C前半	4.0	1.2		0.35	4.1	
822	管状土錘	b	18C後半~19C前半	(2.8)	1.2		0.40	(2.9)	
823	管状土錘	b	18C後半~19C前半	5.4	1.1		0.32	7.2	
824	管状土錘	d	18C後半~19C前半	3.4	3.4		2.00	(14.6)	
825	管状土錘	a	18C後半~19C前半	3.8	3.3		1.50	(18.3)	
826	管状土錘	a	18C後半~19C前半	3.7	3.2		1.40	(16.6)	
827 828	管状土錘 管状土錘	a d	18C後半~19C前半 18C後半~19C前半	3.8	2.8 3.8		1.50	(20.4)	
829	管状土錘	a	18C後半~19C前半	5.5	2.8		1.40	(15.7)	
830	管状土錘	a	18C後半~19C前半	6.0	3.3		1.60	(24.3)	
831	管状土錘	d	18C後半~19C前半	4.4	4.6		2.20	(33.9)	
832	管状土錘	a	18C後半~19C前半	4.0	4.2		2.00	(29.4)	
833	管状土錘	a	18C後半~19C前半	(2.0)	2.5		1.45	(4.3)	
834	管状土錘	a	18C後半~19C前半	4.0	3.2		1.60	28.7	
835	管状土錘	b	18C後半~19C前半	6.5	3.1		1.30	63.2	
836	管状土錘	a	18C後半~19C前半	7.0	3.7		1.70	91.9	
837	管状土錘 管状土錘	a	18C後半~19C前半 18C後半~19C前半	(5.4)	3.9 3.8		1.50	(63.2) (15.8)	
839	管状土錘	a	18C後半~19C前半	(6.0)	3.8		1.80	(59.1)	
840	管状土錘	a	18C後半~19C前半	(2.3)	4.9		1.80	(11.4)	
841	管状土錘	a	18C後半~19C前半	(3.0)	3.0		1.60	(21.8)	
842	管状土錘	a	18C後半~19C前半	(4.0)	3.5		(1.50)	(8.1)	
843	管状土錘	a	18C後半~19C前半	(3.8)	3.0		(1.60)	(6.5)	

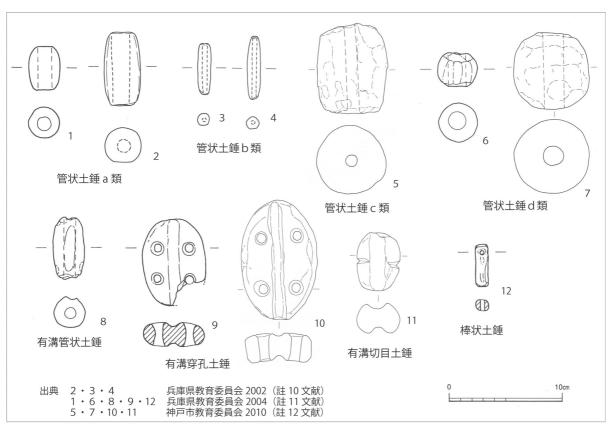


図 1 兵庫津遺跡出土土錘の型式分類

図 に記載されているため分析にはその数値を使用し、 資料が九点出土して より計測した。 いる。 これらの資料については法量計 孔径については 測値が報告 実測

3

ては真鍋篤行の分類名に従い(1)、和田晴吾に従う(3が、弥生時代) 和田晴吾に従う(3が、 今回対象とした二〇〇点の土錘につ 11 古墳時代には存在しないタイプに ずれにもないものについては新 11 て、 型式分類をおこなう。 分

類

方に 孔をもつ有溝穿孔 ある有溝管状土錘 資料中には、 切目 図 1 0 Ø) 12 ある有溝切 中央に貫通した孔をもつ管状土錘、 の5種類が存在する。 土 図1の8)、 目 錘 土 $\widehat{\mathbb{Z}}$ 錘 1 (図 1 の 9 楕円形で中央に溝、 10 11 楕円形で中央に溝、 棒状で両端に孔をもつ 管状 その 土 錘 両 0 方に 側 そ 面 複 棒 0 13 両 数 溝

土

0) が 13

分類名を付した。

は

11

できる さの二分の にしたもので、 面が円形に近いもの 管状土錘に 縦断面の形態が長方形のもの 以上のもの 0 幅が長さの二分の一 11 ては、 (管状土錘d類· 縦断面が隅丸長方形ない (管状土錘a類 未満のもの 図 1 の 6 (管状土錘 図 1 の (管状土) しは楕円形 1 . 2 c 7 類 | 锤 | b 0 図1の5)、 4種類に a 類 で、 類を 図 幅 細 1 縦 が 分 0) 長 長

$\widehat{\mathbb{1}}$ 管状土錘 a 類

であるが、 四 世 紀 備前焼製のものが数点ある。長さ三・七四 から 九世紀まで各時 期 0 b のがあ る。 土 師 (質 0) b 0 cm が 幅

〜一・七㎝の幅に収まる。二・五㎝と大きさにはかなりの幅があるが、孔径は半数以上が一・四㎝が二・八㎝〜六・八㎝、重さが二四g〜四五二g、孔径が一・一㎝〜

(2) 管状土錘b類

 $\Xi \atop {\rm cm}$ ものがある。全て土師質である。長さ二・七四 孔径〇・ ものであり、長さ四四前後、 最も出 <u>√</u> = · である。 四㎝ほどのサイズが標準である。 土点数が多いものである。 cm 一点のみ大型のものが含まれているが、 重さが一・六g~六三・二g、 幅 · · cm 〈 一三世紀から一九世紀まで各時期の ----cm 孔径が〇・二五㎝ 〜六・六㎝、 ほかは全て小型の 重さ四g~五g、 幅が〇・八 <u>\</u>

(3) 管状土錘c類

一・七㎝である。最大のものは須恵質である。三・六㎝~六・一㎝、重さが四〇・二g~三八三・四g、孔径が一㎝~全て一五世紀から一六世紀のものである。長さ四・四㎝~八㎝、幅が

(4) 管状土錘 d類

一五・三g、孔径が一・二㎝~二・二㎝である。が二・八㎝~六・九㎝、幅が三・四㎝~六・八㎝、重さ二八・八g~三のものが多い。一点のみ陶製のものがあるが、他は土師質である。長さ一三世紀以降、一九世紀までのものがあるが、一五世紀から一七世紀

(5) 有溝管状土錘

じである。
さ八七・一g、孔径一・四㎝であり、溝がある以外は管状土錘a類と同さ八七・一g、孔径一・四㎝であり、溝がある以外は管状土錘a類と同一六世紀前半のものが1点のみある。長さ七・二㎝、幅三・八㎝、重

(6) 有溝穿孔土錘

り、 以前のものである。長さは七・ cmである。 重さが一一八g~二四六・八g、 その両側に2つずつ合計4つの孔がある。 五世紀から一八世紀までのものがあるが、一二点中八点が 両面の中央に幅 孔径は○・ • 幅が五・ 五 cm 七 cm 〈 ほどの cm 一七世紀 溝 があ cm

(7) 有溝切目土領

幅〇・五㎝の切目がある。三・八㎝、重さ三九・三g、中央に幅一・五㎝ほどの溝があり、両側に一・七世紀中葉のものが一点のみである。長さ五センチメートル、幅

(8) 棒状土錘

程度であろう。 孔径〇・四㎝であり、折損しているが長さは一〇㎝程度、重さは二〇gー六世紀前半のものが一点のみである。幅一・四㎝、厚さ一・二㎝、

4 各型式の構成比

第 出 が かな層位の認定と時期の比定が行われているが、 ぼ近世まで踏襲されている。 て検討する際にはタイムスケール 一土資料を除き、出土した層位の比定時期を資料の帰属時期としている。 極めて困難である。 土 几 錘は時期による形態の変化が乏しく、 次調査については精緻な調査により中世後半から江 このため今回の対象資料についても、 このため土錘単体で帰属時期を決めること が細かすぎるため、 古墳時代に完成された形 他の調査の資料を併 中 世 戸時代まで細 近世 部の遺構 前

1 おおむね一三 各型式の比率は、 管状土錘c 棒状土錘 世 近世前半 一世紀から一 中世~近世前半 管状土錘a 管状土錘b 管状土錘d (82)管状土錘a類が二一%、 七世 有溝穿孔土錘 有溝切目土錘 紀)、 管状土錘d-有溝管状土錘 近世後半 管状土錘b類が四 近世後半 管状土錘a 管状土錘b (104)八世紀以降) 有溝穿孔土錘 四 0% 50% 40% 70% 10% 20% 30% 60% 80% 90% 100% 0 % 各型式の時期別構成比 図 2 大き

く二時期に分けて比較する。

であ も多い

b,

0)

b

類

である。

0)

土

錘

0

重

量

管

○g未満のもの g未満が続くが、

の四

 \bigcirc Ŧī.

そ

○g未満、

はない。 る。 状土錘c 有溝切目土 類が四 錘、 % 管状土錘d類が二〇%、 棒状土錘は1点ずつの出土であり、 有溝穿孔土 錘が一○%であ 般的なもので

(2) 近世後半

状土錘 d類が五%、 各型式の比率は、 管状土錘c 類、 有溝穿孔土錘が四%である。 管状土錘 有溝切目土錘、 a類が二五%、 棒状土錘は出土していない 管状土錘b 有溝管状土錘は 類が六五 % 点

管

3 時期による変化

その分、 まり変わらないが、 中 -世〜近世前半と近世後半の構成比を比較すると、 管状土錘dと有溝穿孔土錘の比率が下がる。 近世後半には管状土錘bの比率が大きく増えている。 管状土錘a 有溝切目土錘と棒 類 は あ

てい

状

土錘は近

5 土 錘 の 重

が図3のグラフである。 これは全て管状土 が一〇g未満の 世後半には消滅 以下一〇g以 分布をまとめ 五〇g以上一〇 の数 一分の b は 上 0 最 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 10 g x L tole x soe thoo ext 0 108×**

■管状土錘a ■管状土錘b ■管状土錘c ■管状土錘 d ■有溝穿孔土錘 図3 重量別の個体数

と同じ傾向、 大半が分布する小型軽量に特化した土錘、 上をまとめると、 穿孔土錘のみである。 程度である。 には先の構成比で述べたように、 このような傾向は全時期を通じて大きくは変わらないが、 様々な重量をカバーする土錘、 管状土錘a類・ のものの比率が高まり、 有溝穿孔土錘は一○○g以上の重さをカバーする土錘であ ○○gから二○○gの間にあるのは管状土錘a 管状土錘a類は一○g以上の全ての重量に分布してお С 二〇〇gをこえる大型のものは全体の七%ほどで 類・ d 類、 二〇〇g以上の大型の比率が下がる。 管状土錘b類の比率が高まるために 管状土錘b類は 有溝穿孔土錘がこの重さに入る。 管状土錘d類は管状土錘 一〇g未満の重量に 近世後半 類と有溝 a 類 以

と孔径の関係をグラフ化したものである。 次に重量と孔径の関係を確認しておく。 領域1が管状土錘b類である。 図4は管状土錘について重量

孔径は〇・三㎝

一四

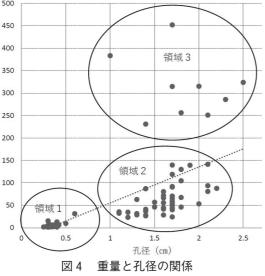
格より 六 cm ある。重量・孔径ともばら 五〇g未満から一 である。領域2は孔径 と3が管状土 つきが少ない。 重量も大半が一○g未満で に集中し、先にみたように から] 軽 しているが、 • いものは孔径が 七 錘a類とd cm の もの 一方領域 五. この g 規 2 が

ものは孔径が大

(8

六 cm

より大きいものが最も多い。



きいという重量と孔径との間 量ともばらつきが大きく、 大型のものについては中小型のものほど規 の相関関係が認められる。 領域3は孔径

重

問題は生じない。 重量よりも孔径の方が重要であると考える。 に装着される。 のであろう。 度の誤差があってもトータルで必要な重さを満たしていれば使用 土 これについてはかなり規格化されている。一方重さについ よって漁網との対応関係を単体の土錘から考える場合は 全ての土錘にかかわるのは、 重量にかなりの幅があるのは、 多い場合は一〇〇〇個以 孔を通す沈る このような理由による 子縄の太さであ てはある が

程

土錘 の孔径と漁網の対応

6

子縄の る。 とまとめたもの これを参考に孔径と漁網の 全国の水産誌や民具などから土錘の孔径 行による研究がある(15)。 類を推定する手がかりとなるものである。 のであり、 管状土錘a類の孔径は全て一・ 土 兵庫津遺跡出土の土錘の孔径の分布をま 錘と漁網の対応関係については、 径と漁網の種類の対応関係を整理 土 が表2である。 一錘の孔径から装着された網の これ 対応関係を検討す は明治期以 cm 真鍋篤 した · 沈

表 2 型式別の孔径									
土錘の孔径	管状土錘 a	管状土錘 b	管状土錘 C	管状土錘 d	有溝穿孔 土錘				
0.5㎝以下	0	111 0		0	0				
0.5~0.6㎝以下	0	2	0	0	0				
0.6~0.7㎝以下	0	1	1	0	0				
0.7~1.1㎝以下	0	0	0	0	12				
1.1~1.6cm以下	17	1	1	4	0				
1.6cmより上	26	0	1	18	0				

格化されていないことが読み取れる。 |錘は単体で用いるものではなく、

30 25

20

15

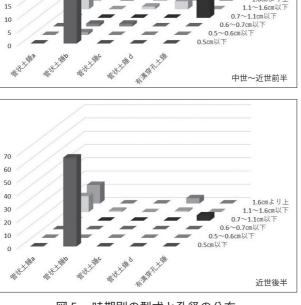
管状 は が 径の範囲にまたがってい 幅 孔は沈子縄と土錘を結合するため 最 有溝穿孔土錘は全て孔径が〇・ も多い。 土錘り類は九七%が孔径 八割以上が 五. cm ほどの溝になる 管状土錘c 一・六㎝より大きい。 る。 類は点数が少ない 管状土 0 七 Ħ. の紐孔なの cm 錘d類は全て孔径 cm から 以下であり、 管状土錘a類と同じ が、 . 管状土 cm沈子縄に対応するの 0 0) 間に収まるが、 が 錘 川 а 類 と b cm 傾向を示す。 前 cm 後 より大 類 0 0 b 孔 0)

管状 民具資料 有溝穿孔 cm 真鍋によると明治期の漁網では管状 より大きいも では 土錘は中 b 類のように孔径〇 夕 イシ 世〜近世の のは地曳網が最も多く、 バ 1) 網 やタ 瀬 イ 戸 Ŧ. ア 内地方を中心に分布するものであ cm 以下の グリ 土 網、 錘 いものは これに刺網や底曳網が続き、 а # 類 ワラ背曳網などまき網 九 d類のように 孔径 割以上が刺網である。

以

七

傾 が 類 網



時期別の型式と孔径の分布 図 5

矛盾はない。 多用されるも しており、 数 のである(16)。 値 的には有溝穿孔土錘をまき網に対応するものと考えて まき網は孔径が cm より大きい ものと対

応

類が主に使用された地曳網漁における技術改良と関連するものであろう。 系の 降は 考えられる。 世紀以前では管状土錘a類とd類が拮抗しているのに対し、 向を示すが、 は刺網系と曳網系の両方に、 以上のように 管状 漁 綱に、 土錘 図5で示したように孔径が 各土錘の型式と孔径の関係は中世 管状土錘a 明治期のデー a 類が優勢になるという変化がある。 類 と d タからの類推となるが、 有溝穿孔土錘はまき網に対応する可 類 が 地曳網などの曳 • cm から近世を通じて同 より大きい 管状土 管状土錘 、網系の漁網に、 錘 土錘 b 八世 類 類 ع d が 能 が С 紀 刺

兵庫県漁業慣行録 『兵庫県漁具図 解 との 比 較 検 討

7

網 量 7 カセ は が 兵庫 (18)より沈子についてのデータをまとめたのが表3であ 不明である。ここに記載されている漁網につい 網が 瓦 県漁業慣行録 五 マカセ網が三、 打網が二〇あった。 (17)によると、 ウタセ網が一 鰶建網もあると記述されてい 明治二〇年頃の \circ 神戸港には 7 兵庫港には 『兵庫 は建網が 県 るが 漁 四 鰯 具 \bigcirc 地 义 \bigcirc 曳

長さ五 丸 である。 形 鰯 力 0 地 曳網 セ 土 一錘で、 五 網 長さ五 cm は は垂水村内山田村 神 長さは不明であるが幅は三・六四 幅 戸 几 市 cm 和 重さ五 田崎 八 cm の土錘である。 町 ○gほどの管状 (現神戸 (現神戸市垂水区) 市 :兵庫区) 沈子縄の径が四 土錘 のものである。 а 0 類がこれに該当する 沈子縄の太さ○・ ものである。 八mと太 沈子 沈子 九 は は

cm

表 3	明治期の海網の沈子	(『兵庫県漁具図解』より)

文 0 引加到 V / / / / / / / / / / / / / / / / / /											
						沈	子				沈子縄
地域	名 称	使用場所	対 象 魚	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	使用 個数	総重量 (kg)	太さ (cm)
摂津	打瀬網	尼崎町	雑魚	土焼製		7.7			21	15.0	
摂津	マカセ網	和田崎町	イナ・ボラ・コノシ ロ・スズキ・サッパ	土焼製	5.5	4.8			片手150		4.8
摂津	鰮建網	駒ヶ林村	オオイワシ・サッパ・ ママカレイ	土焼	4.2	2.1	1.2		44		0.7
播磨	鰮地曳網	垂水村山田村	イワシ	土焼(丸形)		3.6			520		0.9
播磨	投網	垂水村	チヌ・ボラ	鉛	3.9			33.8	180		
淡路	鰆刺網	都志村	サワラ	石				750	245		

※もとは尺貫法により表記。1寸=3.03cm、1匁=3.75gで換算。斜体は胴廻りの寸法から算出したもの。小数点2位以下四捨五入。

状の土錘であった可能性もある

沈子は土錘であり、

幅二·一cm、

神戸市長田区)

(鰯)

ない。 型のものを採用したのかもしれ 個数が二一個と少ないので、 には該当するものはない 兵庫津遺跡出土資料 0 大

という大型のものである。

使用

幅七·七m、

重さ七一四g

のものである。

沈子は土錘であ

は
b類が該当する

瀬網は尼崎町

(現尼崎市

○gほどの管状土錘a類もしく

サイズ的には一〇gから二

どの管状土錘a類もしくはd類 なる。重さ八○gから九○gほ と考えれば、 う記述の 「径」を 径 「廻」の誤記 五 の ほ ど に

が該当する。 ぎるので、 「径一寸五分」とい

打網

(投網)

は垂水村

(現神戸市垂水区)のものである。

幅と厚さが異なるので扁平な形 沈子縄の太さは○・七㎝である。 建網は駒ヶ林村 のものである。 厚さ一・二㎝ 長さ四・二 現 なる。 のかいずれとも判断できない。 そもそも管状土錘b類が刺網に装着されていたという想定が誤りである の網であり、 石製の沈子を二四五個装着している。 本市五色町) 漁具図解』でも近隣で比較できる刺網がないため、 重さは三三・八gグラムであり、 土錘a類とほぼ同じサイズである。 した投網がないため、 『兵庫県漁業慣行録』では兵庫港・神戸港には 兵庫津周辺では明治三〇年頃には小型の刺網が消滅していたのか 管状土錘

り類のような

小型の

土錘が装着

される

刺網と

は異 の鰆刺網を見てみる。これは一つの重さが七五〇グラムの 鉛製の沈子であるが参考として検討する。 長さ四㎝から五 沈子の総重量が一八四㎏ある大型 cm 刺網がなく、 淡路の都志村 幅三mほどの管状

8 まとめ

最後に本稿で検討したことをまとめておく。

2 のは管状土錘である。 有 1 溝土錘・有溝穿孔土 一八世紀以降、 兵庫津遺跡から出土した中世から近世の土錘には、 管状土錘b類の比率が高まり、 錘 有溝切目土錘・棒状土錘がある。 管状土錘

管状土錘・

主体となる

а 類

b 類

以外の型式の土錘の比率が低くなる。 3 土錘では、 孔径と重量では孔径の方が規格性が高 小型の方が規格性が高い。 また小型の土錘と大型

16

土錘を装着

『兵庫

県

(現洲

状土錘 系の両方に、 4 治期 「a類とd類が地曳網などの曳網系の漁網に、 の資料から類推すると、 有溝穿孔土錘はまき網に対応する可能性がある。 管状土錘b類が刺網系の漁網に、 c類は刺網系と曳 網 管

果を比べると、 『兵庫県漁業慣行録』『兵庫県漁具図解』の記載と出土土錘の検討結 小型の管状土錘b類に対応する漁網が見いだせない。

は、 討が必要である。 江戸時代後期以降、 るわけではない。 しかし本稿で検討したように、 江戸時代以前の出土漁具から当時の漁業技術にアプローチするために 明治期の水産誌や民俗資料のデータを利用することが不可欠である。 今後の課題としておきたい。 明治期の状況を江戸時代以前まで遡及できるかどうか、 ことに明治に入っての漁業技術の変化をふまえた検 それは必ずしも出土資料の実態と合致す

註

- (1)年 新修神戸市史編集委員会編 一一三頁 『新修神戸市史 歴史編Ⅲ 近世』一 九
- (3)(2)年 新修神戸市史編集委員会編 以下、遺跡 三九七頁 (埋蔵文化財包蔵地)としての兵庫津については 『新修神戸 市史 歴史編Ⅲ 近世』 兵 (庫津 九
- 大日本水産会兵庫支会編『兵庫県漁具図解』 (ひょうごついせき)」と呼称する。 八九七年 関西学院大
- 和田田 希記念論文集刊行委員会編 晴吾 「弥生・古墳時代の漁具と漁撈」『考古学論考』 平凡社 一九八二年 小林行雄 博士
- 真鍋篤行「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」『瀬戸内海歴史民俗資 九九六年

大阪歴史博物館研究紀要』第一六号 安岡早穂 「土錘からみた瀬戸内海周辺における網漁の選択性 二〇一八年

(7)

- (8) 真鍋篤行「遺物による網漁具の復元」『季刊考古学』第 雄 Щ
- (9) 錘について─」『西宮市立郷土資料館ニュース』第五○号 瀬尾晶太「発掘された「すなどりの具」 —西宮神社社頭遺跡出 九年 土の 土
- (10)几 同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』 三冊 兵庫県教育委員会『兵庫津遺跡Ⅰ 二〇〇二年 (西出地区の調査) 兵庫県文化財調査報告第二 般国道二号共
- (11)告第二七〇冊 一号共同溝整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査 兵庫県教育委員会『兵庫津遺跡Ⅱ 二〇〇四年 (浜崎・ 七宮地区の 調 查 般国
- (12)次調査』二〇一〇年 神戸市教育委員会 『兵庫津遺跡発掘調査報告書 四四

註5文献

(16)(15)(14)(13)註8文献 註6文献

究に拠る。 註6文献 以下土 |錘の孔径と網の対応関係についての 記 述は真鍋の

(17)兵庫県勧業課編 兵庫県公館県政資料館蔵 『兵庫県漁業慣 行録 鹹水漁業之部 巻5』一八八九

(18)4文献

謝 ŋ 辞 兵庫県立考古博物館のご協力をいただきました。 兵庫津遺跡第六·一一~一三·一五次調査出土資料 の調査にあた

、兵庫県企画部地域振興課・当館学芸員